

# 社会事象への関心・表現力を高める取組

国富町立八代小学校  
教諭 金丸 誠

## 1 はじめに

本校は2023年度よりNIE実践指定校となった。実践1年目となる本年度は、まず、新聞を活用した授業実践を通して、新聞に慣れ親しみながら、活字への抵抗感を軽減したり、社会事象への関心をもつたりする機会を作る。そして、新聞を使って思考したことを、自分の獲得した語彙を用いながら、文章を書いていく等、児童の表現力を付ける。これらを目的とし、NIE実践に取り組んできた。

実践については、児童の実態に応じて各担任の創意工夫を大切にしながら行うものとし、「無理なくできる範囲で、児童も教師も楽しみながら」をテーマにしてスタートした。

## 2 本年度の取組

### (1) NIEタイムの実施

本校では、朝のモジュールで学力向上のための時間が週2回組まれている、そのうちの1回をNIEタイムとして、新聞を活用した実践に取り組んできた。NIEタイムでは、新聞に親しむことを目的として行ってきた。

#### ア 1年生の取組

本校では、宮崎日日新聞社のご協力のもと、1年生から3年生の児童に、毎週月曜日に「宮日子ども新聞」が届けられた。

##### (ア) カタカナさがしに挑戦

1年生は、国語科教育の入門期なので、カタカナを学ぶ活動が行われる。今回は、「宮日子ども新聞」を活用し、カタカナの語句を探す活動を行った。教師の説明を聞きながら、子どもたちは、楽しみながら、カタカナさがしを行った。そして、「宮日子ども新聞」の記事を読みながら、カタカナの語句をたくさん見つけることができた。また、全体の場で見つけた語句を発表し、それについて知っていることや思ったことを伝え合い、楽しく交流することができた。

##### (イ) 吹き出し大喜利に挑戦

宮日子ども新聞に毎週記載されている「吹き出し大喜利」にも挑戦した。教師が吹き出しの例を示すと、楽しそうに聞き、その後は、吹き出しを何にするか、場面を想像しながら、表現しようとしていた。



【カタカナをさがそう】



【吹き出し大喜利に挑戦】

## イ 高学年の取組

### (ア) 朝日小学生子ども新聞デジタル版の利活用

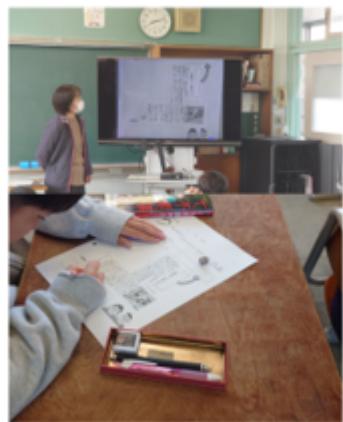
10月からは朝日新聞に申し込みをし、朝日小学生子ども新聞デジタル版を視聴できるようにした。児童は、それぞれのタブレットPCで閲覧し、自分の興味をもった記事を選ぶことができるので、意欲をもってじっくり読み、感想を表現する活動を行うことができた。



【朝日子ども新聞デジタル版の活用】

### (イ) 見出しを考えよう

5年生では、教師が選んだ記事を読み、新聞が考えた見出しに何と書かれていたのか、予想形式で考える活動を行った。11月に行われたNIEタイムでは、宮崎市で行われた「お菓子まつり」の記事を取り上げ、児童は「宮崎市がまんじゅう購入額日本一」になったということに気づき、驚く様子が見られた。教師が、宮崎県内の記事を事前に選んで教材とすることで、地域の行事を知り、社会事象について、関心をもつ場となった。



【見出しつけよう】

### (2) 「国富町宮日新聞の日」での取組

国富町では昨年度より年3回、全小中学校の児童生徒に宮日新聞（小学校3年生以下には宮日子ども新聞）が配付され、新聞を活用した実践を行ってきた。本校でも「国富町宮日新聞の日」において、各学年において授業実践を行った。

#### ア 5年「社会科」での実践

「自動車工業のさかんな地域」の授業でNIE実践を行った。現在の自動車工場の現状を知る上で、生産を再開したことや、海外の工場撤退などの状況を理解することができた。また、日本と海外の自動車工場の状況を知ることで、さらに自動車関連のことに対する興味をもち、主体的に学習に取り組むことができた。

#### イ 3年「算数科」での実践

「いろいろな数を調べてみよう」という課題を設定し、新聞記事にあるさまざまな単位をもつ数を集めて、数への関心を高める学習活動に取り組んだ。単位にも意識させたことで、数や数字への関心が高まっただけでなく、新聞や一つ一つの記事を身近に感じるきっかけにもなった。

#### ウ 宮崎日日新聞社による出前授業

昨年度から国富町内全小中学校で行っている取組であり、小学校は、5年生対象に実施している。そこでは、新聞の作成工程や記事の構成、仕事のやりがいなどを紹介していただき、児童は新聞に興味をもち、様々な質問を行っていた。

### (3) NIE授業公開での実践

本校では、1月26日にNIE授業公開を開催した。授業公開は、2年生の国語科の授業を行った。

#### ア 単元について

本単元「ことばあそびをしよう」は、言葉遊びを通して、その楽しさに気付かせるとともに、語彙を豊かにし、表現力の向上を目指している。

#### イ 本時につながる取組

朝のNIEタイムにおいて、児童が興味をもつそうな記事を選んで範読し、どのようなことが書かれているのかを丁寧に児童に説明してきた。また、新聞の中から、「あ」で始まる言葉（日によって文字を変えている）を探してワークシートに書き出す活動などもを行い、新聞を読むことに慣れ親しんだり、楽しみながら語句の量を増したりすることをねらいとした取組を継続してきた。

#### ウ 本時について

日常生活の中で本学級の児童が使っている語句の数はそれほど多くないため、新聞の中で使われている語句に注目させ、NIEタイムで蓄積してきた語句と本時に見つけた語句を取り入れて折り句の文を作り、折り句の面白さを感じさせるとともに、身近な語句の量を増し、日常生活でも用いることができるようとした。

#### エ 学習指導過程

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点 ☆評価
導入 5分	<p>1 折り句について振り返る。</p> <p>2 本時のめあてを設定する。 いろいろなことばをつかって、あいうえお作文をもっと楽しもう。</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 前時に学習した折り句について振り返り、折り句は、「頭の文字に『あいうえお』などの文字列が隠されていること」や「途中で分節が分かれてもよいこと」などを確認する。</li><li>○ 前時に作った折り句の文よりも更に語句の量を増して折り句作りを楽しむことを確認し、本時のめあてを設定する。</li></ul>
展開 35分	<p>3 本時の見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 学習活動を確認する。<ul style="list-style-type: none"><li>① 新聞から様々な言葉を集める。 ↓</li><li>② 集めた言葉を使って折り句を作り、発表する。</li></ul></li><p>4 新聞からいろいろな言葉を見つける。</p><ul style="list-style-type: none"><li>○ グループ内で分担し、決まった文字から始まる言葉を探させる。 ・あほのまき</li></ul><p>5 見つかった言葉を持ち寄ってグループで折り句の文を作る。</p><ul style="list-style-type: none"><li>○ グループで話し合いながら折り句の文を作る。</li></ul></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 語彙の少なさを補うため、また、日常ではありません使うことのない言葉にも触れさせるために、新聞記事の中から言葉探しをする。</li><li>○ 見つけた言葉はワークシートに書き出させることで、その後の折り句の文作りをしやすくする。</li><li>○ 1グループの人数は2～3人とし、一人一人が主体的に言葉探しやその後の折り句の文作りに参加できるようにしたい。</li><li>○ これまでのMIEタイムで見つけてきた「ことばの木」や本時の言葉探しで見つけた言葉だけで折り句の文を作ることが難しい場合には、教科書巻末の「ことばのたからばこ」や自分で知っている言葉を使ってよいようにすることで文が作りやすくなるように配慮する。</li><li>☆ 新聞を使って、語句の量を増し、あいうえお作文で使おうとしている。</li><li>☆ 楽しんで折り句作りに取り組んでいる。</li></ul>

	6 グループで作った文を発表し合う。	○ 他のグループの作った折り句を聞くことで、言葉遊びの楽しさやアイデアに触れ、発想を広げ POSSIBILITY ことができるようする。
終末 5 分	7 本時学習のまとめをする。 ○ 折り句を作つてみての学びや感想をまとめる。	○ 折り句作りで学んだことや言葉遊びの楽しさ等について振り返ることで、更に次時の言葉遊びを楽しもうとする態度に繋げる。

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

- 教師が意図的に選んだ記事を通して、地域社会を知り関心をもつことができた。
- 週1回のNIEタイム実践を続けることで、児童が新聞に対する関心が高まり、活字に対する抵抗感は徐々になくなってきた。

#### (2) 課題

- 9月よりスタートしたこれまでの実践は、児童に新聞に触れ、関心をもたせることはできたが、表現力を高める実践までは十分できなかった。今後は、新聞を読んで思考したことを文章に書くなど、表現力を高めるための実践を、充実していく必要がある。
- 全国紙が複数届いたが、複数の新聞を活用した実践までは至らなかった。複数の新聞の読み比べを行い、社会事象に関して様々な見方があることを知る等、複数の新聞を活用した取組も行うと、さらに充実するのではないかと考える。